

得るフランスが英國のヨーロッパに對する再度の戰爭に引きずり込まれて了つたといふこと、之こそフランス没落の歴史的悲劇の中で最も傷ましい一齣といはねばなるまい。

ブルグドエルファー著「白色民族は

滅亡するか？」(二)

本 多 龍 雄

六 歐洲諸國の將來人口の推定と其の人類別比重の變遷

西・中歐諸國に於ける所謂自然増加なるものの錯覺的假面を剝いで其の現状維持にも困難な出産不足の真相を摘發した後、著者は進んで歐洲各國の將來人口の推定を一覽せしめてゐるが(第八表)、之によつてみても西・中歐諸國の最大人口は近く今世紀前半期中に達せられ、後半期には多少の程度こそあれ人口遞減の趨勢を辿ることになつてゐる。北歐諸國では強大な人口増加期は既に了り、今世紀中頃には減少しない迄も停止状態に入り、今世紀末の三乃至四半世紀中にはいよいよ遞減期が來ることになるが、唯イタリー、スペイン、ポルトガル、特に東歐のスラブ系諸民族、竝にバルカン諸國は、現在の年齢構成と出産力とから見て尙著しき人口増加が期待されてゐる。資料難のソ聯に對しても著者は同様の期待をしてゐる。

第八表 歐洲諸國の將來人口の推定

調査人口	推定人口			指數(一九〇〇=100)
	一九〇〇年	一九二五年	一九五〇年	
獨逸	六,三九〇	六,三九五	六,七七一	101
オーストリー(獨逸統計局)	六,七三三	六,六八〇	六,六〇〇	101
フランス(A. Saury)	四,一八三	四,〇七三	四,〇六四	100
大ブリテン(獨逸統計局)	四,七九〇	四,六七四	四,三三六	100
ベルギー(F. Baudhuin)	八,〇三三	七,九一〇	八,〇一〇	101
和蘭(獨逸統計局)	七,九三六	七,八二九	八,八八二	101
西・中 歐 合 計	一七,三〇〇	一七,一五二	一七,六三四	101
瑞 典(獨逸統計局)	六,四三三	六,三二二	六,三三〇	101
諾 威(獨逸統計局)	二,八四〇	二,九一〇	三,〇〇〇	101
芬 蘭(獨逸統計局)	三,五五九	三,五九二	四,一〇〇	101
スカンデナヴィア合計(フィンランドを含む)	一六,一七〇	一六,一七〇	一七,一七〇	101
イタリー(獨逸統計局)	四,一三〇	四,一五九	四,四四四	101
波 蘭(獨逸統計局)	三,一三三	三,〇八三	三,七五八	101
ウクライナ(獨逸統計局)	二,九〇八	三,〇八一	三,五〇四	101
レトニア(獨逸統計局)	一,九〇〇	二,〇六五	二,四六二	101
東 歐 合 計	八,〇三三	八,二一四	九,〇九四	101
ハンガリー(獨逸統計局)	八,六八八	九,四〇〇	九,八〇〇	101
ブルガリア(獨逸統計局)	五,四九七	五,九三〇	六,九七〇	101
ギリシヤ(獨逸統計局)	六,二〇五	六,四〇〇	七,六〇〇	101
バルカン諸國合計	一七,九〇〇	一八,七三〇	二一,五七〇	101

この推定計算によると、フランスは既に一九六〇年に現在より約二百萬減となり、英國及びスカンデナビア諸國は今後なほ姑く僅小の増勢を示すが併し實際には最早其の民族的生長を止めて了つてゐることになる。獨逸の推定は出生率に爾後更に二五%漸減するといふ假定(この假定は事實上照していつてゐる)の下に爲されたものだが、一九四五年に六千七百七十萬を以て其の最高人口に到達し、以後は初めは緩漫にだが後には急激に減少してきて一九七五年には六千萬に、そして二〇〇〇年には四千七百七十七萬にまで萎縮、

即ち前世紀の未曾有の増大に比肩する未曾有の落潮を辿つて今世紀末には今より五十年前の獨乙人口(大戦前)に逆戻りして了ふことになる。この趨勢を辿つてゆくならば、假令出生率が一九二七年に對し既に二四%低位に落ちてゐる現在(一九三三年當時)程度で停止するとしても、二〇五〇年には二千五百萬、即ちナポレオン戦争終了當時(一八一六年)の昔に還つて了ふことになる。著者はこの恐るべき推定結果に唯徒らに眼を閉ぢるの怯懦を戒めながらも、さりとして之を救治し難き宿命的事實として肯定してゐるわけではない。逞しい生活意欲の回復こそ著者によれば最善にして唯一の救済策であるわけで、ナチス政府の人口政策も亦こゝに出發するものであるはいふ迄もなからう。

續いて著者はこの將來人口の推定を既往の事實と結び附けて、歐洲人口の重點が次第に西より東へ、ラテンからゲルマンへと移動

し、更に將來はスラブの壓倒的優勢へ偏向しゆく事實に注目し、次の如き數字を以て之を示してゐる。

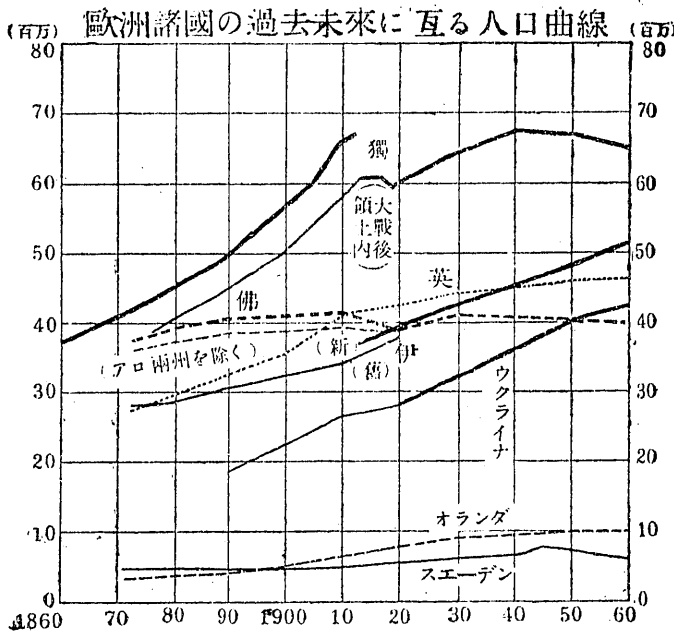
諸國群	一八二〇年	一九二〇年	一九三〇年	一九六〇年
ゲルマン系諸國群	三六% (百萬)	三三% (百萬)	三〇% (百萬)	二六% (百萬)
ラテン系諸國群	三三% (百萬)	三〇% (百萬)	二八% (百萬)	二六% (百萬)
スラブ系諸國群	一七% (百萬)	二二% (百萬)	二六% (百萬)	三三% (百萬)
計	一七% (百萬)	二二% (百萬)	二六% (百萬)	三三% (百萬)

### 七 各大陸別の人口收容力と白色人種の將來

白色人種は現在世界總人口の三分の一を以て世界陸地の約四分の三を占有してゐるが、この白人の世界支配を根柢から揺り動かすものは有色人種

の強大な生産力に外ならぬ。於是、著者は將來の増大人口を扶養すべき各大陸別の人口收容餘力を検討し乍ら、之に於ても亦事態は白色人種にとつて決して輝かしいものではないことを著者は指摘しようとする。

そこで著者の先づ引用するのは著名な地理學者アルブレヒト・ペンクが一九二四年プロシヤ學士院に於て試みた就任講演(註)だが、之によると全大陸の可能收容人口は八十億で、その内譯は歐亞に二十億八千萬、アフリカに二十三億二千萬、北米に十一億二千萬、南米に十二億、濠洲に四億八千萬、之を現在の世界人口(二十億)の實際の分布状態と比較してみると次の如くで、



現在人口の分布	八〇	七	〇・五	八	四
未來人口の分布	二六	二九	六	一四	二五

現在最大人口收容者たる歐亞はアフリカにその地位を譲り、北米と南米とはその順位を逆にするこゝとなる。

(註) Albrecht Penck: „Das Hauptproblem der Physischen Anthropogeographie.“ Sitzungsbericht 1924, XXII. Vergleich. Zeitschrift für Geopolitik, Mai 1925.

著者は又アロイス・フィッシャーの同趣旨の研究(註1)をも引用してゐるが、之によると西部歐洲は(外國貿易等による外部依存的人口扶養力を除けば)既に其の内部依存的(自然的)人口扶養力を越えてをり(註2)(西歐平均では超過一七%、獨乙は四〇%)、歐洲以外で同様の過大人口をもつ主要國は日本(三二%)だけとなつてゐる。

(註1) A. Fischer, Zur Frage der Tragfähigkeit des Lebensraumes. Zeitschrift für Geopolitik. 1925, Heft 10 u. 11.

(註2) フィッシャーの推算に對する最近の再吟味は西歐の(内部依存的)人口扶養力を更に高く現在人口以上に評價してゐる。

さてフィッシャーの推算する世界の最大可能人口は(現在の生産技術の下で)六十二億で、その内譯に於てはペングの濠洲及び南米に對する評價を過大とし、之に反し加奈陀を更に高く買つてゐる。この推算によつて現在及び未來の各大陸別人口の比重を百分比で比較してみると次の如くで、

現在	歐洲	アジア	アフリカ	アメリカ	濠洲
未來	九	二七	二七	三三	五

又、各大陸別の追加收容力及び其の割合を見ると次の如くなる。

現在人口	内部依存的 最大可能人口	追加 人口	即ち現在の〇・二四倍
歐洲 (百萬)	五〇〇	五七〇	二〇
アジア	一、二五〇	一、七〇〇	〇・五倍
アフリカ	一五〇	一、六五〇	一〇・倍
アメリカ	二五〇	二、〇〇〇	七・倍
濠洲	一〇	二、八〇	二七・倍

之によつて見ても將來の世界人口の重心が歐亞からアフリカ及び南米大陸へ移動することは明瞭で、増加人口の四分の三はこの兩地方へ配分されることになる。それでもアジアは尙ほ現在の一倍半に増加し得るが、歐洲の方は單に現在の十分の一餘を收容し得るに過ぎず、それも現在なほ七〇%の餘剩收容力をもつてゐる東歐の力で、西歐が現在すでに過剩状態にあるは前述の如くである。(前掲註2参照)。

尤もこの種の推算が莫大な人口を割り當てゝゐる地域が實際に未來の人類生活の主要地となるか如何かは別問題で、著者は寧ろ之らの地域が現状のまま専ら資源の輸出地として止まることを豫想もし、又望んでもゐるわけだが、その場合工業立國による外國貿易依存の國家的危險性は前大戰に於ける獨逸の經驗に鑑み著者の特に力説するところで、新農民層の創出による獨逸の農業的基礎強化の必要を説く所も亦こゝにあらう。問題はいさゝか刻下焦眉の政治經濟問題に一轉した様だが、西歐工業國の將來の不安を語るのが著者の主旨で植民地工業の勃興、特に日本の工業的躍進は著者の特に重視する所である。其の豊富なる資源並に人口と西歐的概念を以てしては理解し難い低勞賃とは三千萬白人勞働者の死活問題に外ならずとまでいつてゐる。孰れにもせよ白色民族の未來は暗く、其の出産減退は著者の痛心事であるらしい。著者はこゝでも亦繰り返し經濟と技術とを極度

に發展させた白色諸民族が此の自ら産める經濟の奴隸となつて純經濟的な處世觀の犠牲となつたことを指摘し、その生活を經濟の法則に従はせた民族、經濟の無條件的な支配を默許し、經濟を自らの運命として了つた經濟的な考へ方から生じた人口制限は其の一時的生活餘力を必ず他の多産人種によつて占有されて了ふのが人種闘争上の生物學的通則であるからで、不知不識の間に行はれるこの種の人種闘争を髣髴せしむる一例として著者はレーゲンスブルグ市の興味ある宗門統計を擧げてゐる。即ち宗教改革後完全に新教化したこの都市は、都市通有の出産寡少の爲に次第に周圍の舊教人口の流入を見、一八五〇年には其の四分の三、現在では約十分の九が再び舊教徒となつて了つてゐるといふ。

## 八 世界各地に於ける生物學的人種闘争

最後に著者は世界各地に於ける所謂生物學的人種闘争の個別的檢討に取りかゝる。歐洲で著者の先づ狙上に乗せるのは古典的な出産減退國フランスで、こゝでは國籍所有の外國人は一八五一年には總人口の一%、一九二一年には四%、一九二六年には六%、そして一九三一年には總數三百萬、總人口の七%に及んでゐる。併しフランスでは兩親の國籍の如何を問はず佛國生れの子供は皆フランス人と見做される故實際の混血状態は更に甚しいわけ、現在の抱容異民族は少くとも六百萬、一五%と著者は讀んでゐる。而かもこの異民族中特に兵士として移入されたアフリカ系黒人の多いことは一世紀に亙るフランス出産減退の恐るべき結果を如實に物語るものなりとして、著者は之を外國兵士によつて國を護らうとした帝政末期の

ブルグドエルファー著「白色民族は滅亡するか?」(二)

ローマに比較してゐる。特に傾聴すべきは著者が數のみに重きを置くフランスの人口政策の弊害を指摘してゐる點で、出産賞與金制度の如きが多産的な異民族を一層増殖させる様な結果となつてゐることを注意してゐる。尚著者は南部スペイン及びポルトガルに於ても特に其の下層階級に於ける黒人との混血事實を擧げ、フランスと併せて此の地方を歐洲に於ける有色人種侵入地域と呼んでゐる。

著者は更に同様の混血現象が中南米に移殖せるラテン系人種にも看取し得ること、而かも混血しなかつた所では次第に有色人種に壓倒されてゆく事實を指摘してゐる。メキシコの白色人口は總數、割合共に低下の傾向にあり、其他の中米地方でも白色人口は僅小の上層階級を占めるに過ぎない。南米のコロンビア、エクアドル、ペルーでも三分の一強はアメリカ印度人であり、ボリビアでは約二分の一に及んでゐる。アルゼンチン、チリー及びブラジル(計五千五百萬)は大體白色人口と見られてゐるものの、アルゼンチンを除いては混血は相當に強い。

第九表 アメリカ人口中の有色人口(單位百萬)

	總人口	黒人	アメリカ印度人	混血	支那人及日本人
北米	一三三	一二	〇・三五	一・四	〇・三五
中米	三四	三	七	一八	一
南米	八三	九	一一	二五	〇・一五
計	二五〇	二四	一八・三五	四四・四	〇・五〇

特に著者が問題とするのは南米の出生率が千に付四〇(西歐の二倍以上)、自然増加が千に付二〇乃至それ以上(中・西歐の出生率より大)であることで、而かも之はアメリカ印度人の多い地方に高く、アルゼンチン

の如き處では既に西歐の出産減退傾向の看取せられることである。著者が特にアメリカ印度人、白人及び黒人の夫々優勢なる國別に掲げてゐる出生及び自然増加率は次の如くである。

メキシコ	コスタリカ	ホンジュラス	サルバドル	エクアドル	ガテマラ	コロンビア	アルゼンチン	ヴェノスアイレス市	チリ	ウルガイ	サンドミンゴ	ジャマイカ	ベネズエラ	トリニダード島	出生率		自然増加率	
															(人口千に付)	(人口千に付)	(人口千に付)	(人口千に付)
								(一九一〇—一九三〇)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		四七・二	一八・九	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		四五・一	二三・八	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		四〇・七	二二・一	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		三八・九	二〇・五	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		三九・一	二一・〇	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		三七・四	一六・四	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		三〇・四	一七・三	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		二八・六	一六・二	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		三五・〇		
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		二二・〇	一一・四	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		三四・二	一一・四	
								(一九三二)	(一九三二)			(一九三二)	(一九三二)	(一九三二)		二二・四	一一・四	

インディオ種	白人	黒人
三九・九	二七・八	九・二
一八・六	二七・五	一六・一
一六・一	一一・五	九・二
一八・六	二七・五	一六・一

著者はこの中南米の現状から此處の白色人口は歐洲よりの移入民に俟つ外有色人口に對抗し難しとしてゐるが、併し生むことに倦れた歐洲の現状から之も亦不可能事なりと嘆じてゐる。

北米合衆國の黒人問題に就ては著者は混血を好まぬアングロサクソン人

種の特性を擧げて問題の核心は其の出産力にありとしてゐる。一九三〇年の調査によると總人口一、二二三(百萬)中白人一、〇九(百萬)黒人一、二(百萬)、黒人は總人口の約十分の一(九・七%)で、黒人が總人口の五分の一(一九・三%)を占めてゐた一七九〇年(同國最初の國勢調査年次)當時と較べると白色人口に對する比重を激減させて來たことになるが、(第十表参照)、併し奴隸輸入の殆んど無くなつた一八六五年以降をとつてみると黒人人口は全く自力で三倍に増してをり、且つ第十一表に見る様に一九二〇—一九三〇年間の黒人増加率は現在なほ多數の移民人口を含む白人を既に凌ぐに到つてゐることを著者は指摘してゐる。(註)一九二〇—一九三〇年間の白人移入人口は四百萬、黒人は五萬。

(註) 尤も一九二〇年の黒人調査は多少不完全であつたことを著者は附記してゐる。従つて一九二〇—一九三〇年の黒人増加率は實際よりも多少高く出てゐることになる。

第十表 北米合衆國に於ける白色及黒色人口の増加

白人	黒人	白人	黒人
一七九〇	三、二七二	一八七〇	三三、五八九
一八〇〇	四、三〇六	一八八〇	四三、四〇三
一八一〇	五、八六二	一八九〇	五五、一〇一
一八二〇	七、八六七	一九〇〇	六六、八〇九
一八三〇	一〇、五三七	一九一〇	八一、七三二
一八四〇	一四、一九六	一九二〇	九四、八三二
一八五〇	一九、五五三	一九三〇	一〇八、八六四
一八六〇	二六、九三三		一二、八九一

第十一表 北米合衆國に於ける白人及び黒人の増加(一八六〇—一九三〇)

年	白人人口			黒人人口		
	總數	前調査年次に對する増加實數	同百分比	總數	前調査年次に對する増加實數	同百分比
一八六〇	二六、九二二、五三七	—	—	四、四四一、八三〇	—	—
一八七〇	三四、三三七、二九二(1)	七、四一四、七五五	二七・五	五、三九二、一七二(1)	九五〇、三四二	二二・四
一八八〇	四三、四〇二、九七〇	九、〇六五、六七八	二六・四	六、五八〇、七九三	一、一八八、六二一	二二・〇
一八九〇	五五、一〇一、二五八(3)	一一、六九八、二八八(3)	二六・九	七、四八八、六七六(4)	九〇七、八八三(4)	—
一九〇〇	六六、八〇九、一九六	一一、七〇七、九三八	二二・二	八、八三三、九九四	一、三四五、三一八	一八・〇
一九一〇	八一、七三一、九五七	一四、九二二、七六一	二二・三	九、八二七、七六三	九九三、七六九	一一・二
一九二〇	九四、八二〇、九一五	一三、〇八八、九五八	一六・一	一〇、四六三、一三一	六三五、三六八	六・五
一九三〇	一〇八、八六四、二〇七(2)	一四、七四三、八三三(2)	一三・五	一一、八九一、一四三	一、四二八、〇二二	一三・六

(註) (1) 推定により補正 Census 1910, Vol. I, S. 127 参照 (2) 一九二〇年に七〇〇、五四一人と推定する、メキシコ人を除く Census 1930, Vol. III, I, S. 7 参照 (3) 一九九〇年にアメリカ印度人地方及びアメリカ印度人に對する留保區域に於ける留保區域に於ける黒人一八、六三六人を含む  
リカ印度人地方及びアメリカ印度人に對する留保區域に於ける黒人一八、六三六人を含む

第十二表 ニューヨーク市に於ける黒人の進出

年	總人口	黒人人口	其の百分比
一九〇〇	三、四三七千	六、九三〇	二〇・八
一九一〇	七、九五二	一六、〇三五	二二・四
一九三〇	一、九三〇	一、二〇〇	七・五

(括弧内はニューヨーク、シカゴ、ピラデルフィア、デトロイト、タリフランシス、セントルイス及びワシントン七大都市の合計)

ブルグドエルファー著「白色民族は滅亡するか？」(一)

一九一〇—二〇 一六・九(二二・八) 六六・三(七五・〇)  
 一九二〇—三〇 二〇・七(二八・五) 一一四・九(八四・三)

更に著者は全國に於ける白人、特にアングロサクソンの出産率の西歐的水準化や、その都市集中傾向(一九三〇年調、黒人の四二%に對し白人五八%)など將來に愈、暗い影を投げるものとしてゐる。アメリカの統計學者ウェルプトンの北米合衆國將來人口の推定(一九二八年に行へるもの)によれば次の如くで、

一九三〇年	一二一・五四	一九六〇年	一四三・九〇
一九四〇年	一三二・五〇	一九七〇年	一四四・六〇
一九五〇年	一三九・八〇	一九七五年	一四二・九〇

その最大人口は一九七〇年の約一億五千萬となるが、著者は之を全國の最大可能收容人口五乃至六億と對照し乍らその餘白を充たすものが恐らく白人種ではないだらうことを確言してゐる。尙、移入人口を除く白人の増加は一九五〇—六〇年に極限に達するが、黒人は(一九二八年の推定で)一九七五年に千六百萬以上となり、其後もなほ上昇傾向を辿ることになつてゐる。

白人濠洲主義に籠る濠洲については著者は其の歐米に比肩する都市集中や産兒制限の事實を擧げ、最大可能人口三億と推算されるこの大陸を長く白人の下に獨占するの至難なるべきを豫告してゐる。而かも世界的過剩人口の杞憂を説く論者の不思議にもアメリカと竝んで濠洲の人口統計學者中に見出されるのも面白いが、この矛盾を著者は自ら占有し難い無人の大陸へ押し寄せて來ようとしてゐる多産的な東アジアの有色人種への恐怖の生む結果だとしてゐるのは一理あるかも知れぬ。この恐怖の張本人であるらしい日本に就ては最近の滿洲建國に到る迄の近代の領土擴張史を其人口増加の當然の結果と著者は解釋してをり、南洋委任統治諸島の獲得は日本人

に此の無人の大陸へ踏み込む足場を與へたものだと云つてゐる。更に日本移民の遠く南米にまで及ぶ進出にも著者は注目してゐるが、この點では支那人の方が更に著しく、所謂華僑の海外發展狀況に就いて著者の掲げてゐる數字は次の如くである。

マラッカ半島(一九二二年)に	一、〇五〇
内 海峽植民地に	四三五
マレー諸州に	六一五
蘭領印度(一九二九)に	一、八三五
比律賓(一九二七)に	二〇〇
濠洲(一九二八)に	二〇
南米に	二五〇

最後にアフリカに就いても著者は褐色及び黒色人口の異常な生産力に就いて報告してゐる。埃及では出生率人口千に付四三(自然増加一七)、アルゼリアでは土着人に於ては三四(自然増加一六)であるに對し、アフリカ在住の白人に於てはアルゼリアでは出生率人口千に付僅かに二四、南阿で二五に過ぎず、更に今後の醫療施設の普及が土着人の自然増加を一段と著増せしむるに違ひないことを著者は豫期してゐる。殊に莫大な人口收容力をもつ内部アフリカの熱帯地方が之ら土着人にのみ許された未來の定住地であることは言ふ迄もなく、溫帯地方に於いても亦彼等は今や斷然攻勢的狀態にあることを告げて著者は前大戰に於けるアフリカ土民軍の起用が齎した植民地統治上の悪影響にまで言及してゐるのは嘗ての戰敗國獨逸のフランスに對する忿懣でもあり皮肉でもあらう。

## 九 結 論

「白色民族は死んで了ふか?」といふ本著の主題に答へて著者はいふ。こ

の言葉遣ひをあまりに極端だといふなら斯ういへばよい、白色民族は未だ生きてゆけるかと。併し生きるといふことは生長し向上することである以上、生活力と膨脹力とを失つて了つた白色民族は將來の世界人口の比重の上で有色民族に壓倒され、延いて現在の白人による世界支配も危くなつてくる。勝敗の決が單に頭數の問題でないことは云ふ迄もないが、遺傳學は上層階級と都市に於て行はれる人口減少が民族の逆淘汰を招來することを教へてをり、また混血現象が起るとすれば文化水準の低下と破滅を免がれることは難かしい。それが嘗てはアッシリア、エジプト、ギリシヤ、ローマの運命であつたし、今や白色諸民族の運命となりかけてゐる。それにも拘らず、ヒットラーとムッソリーニを除いて、指導的政治家中たれ一人として此の問題に注目する者がないと。

併し著者の本心は絶望的ではない。著者は一時的景氣の回復による出生増加の如きに樂觀するを戒め乍らも、英雄的で實は卑屈な運命觀的悲觀論をも斥け、民族興亡の自然法則は生物學的に謬りなりとして、民族は若し自らにして欲するならば永遠に生きてゆくと主張してゐる。人口政策的施設の効果に就いても著者は懷疑説を斥け、時期を失せるギリシヤ、ローマの先例と異なり現在の白色民族には起死回生の途ありとして、その好個の實例としてナチス政權確立後の獨逸人口現象の回復歩調を報告してゐるが、確かに其後の獨逸人口統計の數字は著者の主張を首肯せしむるに足るものがあるやうである。遺傳病の子孫防止法、家族扶養者に對する保護的税制、特に人口政策を主眼とせる世襲農地法等一聯のナチス人口政策が着着効果を擧げてゐることは既に人の知る如くで、試みに出生減退の底を衝いてゐたナチス政權確立の年より本著出版後に及ぶ出生率及び自然増加率を擧ぐれば次の如くである。

	出生率	自然増加率
一九三三年	一四・七	三・五
一九三四年	一八・〇	七・一
一九三五年	一八・九	七・〇
一九三六年	一九・〇	七・二
一九三七年	一八・八	七・一
一九三八年	一九・七	八・〇

### 第三號正誤訂正

○「滿洲に於ける移動人口」勞働力としての苦力「其の一・三二頁、下段、註、第九行に「K<sub>1</sub>」とあるは「K<sub>2</sub>」の誤り。

### 第四號正誤訂正

○ブルグドエルファー著「白色民族は滅亡するか？」(一四八頁中にある「再生産率」とは「純再生産率」の謂ひ。

○重商主義時代の人口政策(埋め草)五一頁、上段、第八行(一六六二三)年とあるは(一六二三)年、下段、第三行三、國外では……とあるは「三、國外移住防止政策」スベインでは……の夫々誤り。

○トイトマス著「貧乏と人口」五四頁、上段、最終行「結核死亡依率のつてが貧富に貧民病甚しく異なることは……」とあるは「結核が貧民病で、その死亡率が貧富に依つて甚しく異なることは……」の誤り。